父と子供たち

豊島与志雄

平時にあっては、父親は子供たちにとって、一種の大きな友だちであり、且つ、雨露をしのぐ家屋のようなものである。時々相手になってくれ、またじっとそこに控えていてくれる、それだけで充分なのだ。その影で、子供たちは彼等自身の世界を持つ。

休暇になって、何かの興にかられ、三人の子供たちだけで相談しあって、いきなり宣言する。

「お父さま、あたくしたち、今晩徹夜するのよ。」

「え、徹夜……？」

「みんなで、一晩徹夜してみることにきめたの。お父さまは？」

「お父さまは……さあ……。」
云いしぶってるのがおかしくて、父も子供たちも笑いだしてしまう。がそのあとで暫くして、子供たちは父を誘いにくる。
「お父さま、今晩、お仕事がおありですか。」
「なぜ？」
「今ね、きくやが、アイスクリームをそう云いに行ったの。お父さまの分も一つありますよ。だから、それがくるまで、トランプをするの。」
もうそれにきめてるという顔付だ。だから父もその通りになる。四人でトランプの遊びをして、アイスク

リームを一つずつたべて……さてそれから先は、もう、父親は書斎に籠ろうと、寝室に退こうと、全く自由だ。用は済んだのだ。

「おやすみなさい。」と子供たちは云う。

父親は寝る。子供たちは徹夜だ。

＊

非常時にあっては、父親は子供たちに対して、一種神秘な力を持つ。子供たちはその力によりかかってくる。

三十九度以上の病熱になやまされてる子供のそばに、父親は殆んどつききりでいる。夜がふけて、看護婦は

うつらうつらしている。覆いをした電灯の光のうす暗いなかで、熱にうかされた子供の大きな黒い瞳が、じっと父親の方に向けられる。何かを訴えてるようだ。

「なあに？」

「…………」

返事もなにもない、その沈黙のなかに、魂が溺れていく……。

「大丈夫よ。」

「…………」

「じきになおりますよ。」

「なおりますよ。」

「あしたから、熱がさがるの。」
「熱がさがるの。」
「今日は、いい気持だ。」
「いい気持だ。」
子供はうっとりと、赤ん坊のように父の言葉をまねている。
「だから、もう、ねんねしましょう。」
「ねんねしましょう。」
「おめめつぶりましょう。」
「おめめつぶりましょう。」
子供は眼をつぶる。

「ねんねしましょう。」
「ねんねしましょう。」
父親の掌に小さな手を任せたまま、子供はうとうとと眠っていく……。何か大きなものに信頼しきった眠りだ。

*

この子供たちには、烱眼なる読者が既に察するだろう如く、母親がない。そして、母親の細かな監視の眼がないだけに、至って自由である。自由な子供たちは、亡き母親への追憶を中心に互いに結びつくこと以上に、また互いに年齢の差の少ない女児二人に男児一人とい

う実情以上に、自由な境涯にあるというそのことのために、極めて仲がよい。然るに、仲のよい自由な子供たちには、ただ精神的規律だけが必要だ。云いかえれば、自律的にしっかりしていなければならないという感情が必要だ。

その一事が、まだ子供たちにはよく会得出来ないらしい。

よそから、子猫が一匹来る。まだ小さくてよくしつけの出来ていない子猫だ。食卓の上にはい上る。食事の時になき立てる。遠慮もなく皿に頭をつきこむ。時とすると、とんでもない場所にそそうをする。ところ

が、その不行儀を叱ることが、子供たちにはどうしても出来ない。

「可哀そうだ。」と彼等は云う。

猫のような飼養動物にとっては、精神的規律は第二の天性になるということが、子供たちには分らないのである。

「だって、可哀そうよ。」と朗かに云う。

父親は苦笑する。それから微笑する。子猫に対する子供たちの朗かな愛撫が、彼の微笑を誘うのである。そして、子猫は叱っても、子供たちはまだ叱れない……

……と思うのである。

底本：「豊島与志雄著作集　第六巻（随筆・評論・他）」未来社
1967（昭和42）年11月10日第1刷発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
2006年4月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。